

## 2020 年度事業計画

### I. 2019 年度を振り返る

2019 年度も、芸術性の追求” “社会性の拡充” をテーマに事業を展開した。4 月には楽団の一層の飛躍を目指し、「第 6 回ヨーロッパ公演」(4 か国 10 公演、指揮：ピエタリ・インキネン) および帰国公演を行った。

文化外交の役割も担う本事業では、楽団初となるヘルシンキ公演、及び 6 月東京での「特別演奏会」と 2 都市で「日本・フィンランド外交関係樹立 100 年記念公演」が行われたことは特筆すべき成果であった。またウィーン公演は日本オーストリア友好 150 周年、ロンドン公演は日英文化年間などの後援を得、いずれも文化外交上意義の深い役割を果たした。13 年ぶりのヨーロッパ公演は音楽的にも高い評価を受け、とりわけウィーン公演では絶賛を博した。

首席指揮者ピエタリ・インキネンとはベートーヴェン交響曲ツィクルスも開始（～2021 年）。2019 年度はこのほか、東京定期演奏会でのオペラ《カヴァレリア・ルスティカーナ》演奏会形式上演、オペラ《リゴレット》出演、外国人指揮者の招聘、等の大きなプロジェクトが目白押しとなった。

また、6 月には上皇・上皇后両陛下のご臨席のもと、創立指揮者・渡邊暁雄の生誕 100 年を記念する演奏会を開催した。45 年の節目を迎える九州公演、夏休みコンサートも大切に継続した。

そして、「被災地に音楽を」の活動を発展させた“東北「夢」プロジェクト”が盛岡市でスタート。2020 年度は福島市へも拡充を計画中である。

2018 年から開始された「落合陽一×日本フィルプロジェクト」も継続、アーツカウンシル東京のほか文化庁の新たな助成を得た。

2019 年度はこのような多彩な活動で、あらゆる人々へ、世代へ、地域へ、世界へ音楽を届けて行く積極的展開の年となった。

なお 2020 年 2 月～3 月、「新型コロナウイルス感染症」問題が発生、オーケストラでは主催、受託あわせ 12 公演と室内楽等 11 事業が中止、延期を余儀なくされている。(3 月 9 日現在)

## II. 2020年度の経営方針

経営目標として「あくなき演奏力の向上」「財政基盤の強化」を引き続き堅持する。事業においては、引き続き“芸術性の追求”“社会性の拡充”をテーマとし、両者を兼ね備える楽団としての成長を目指していく。

活動の三本柱（「オーケストラ・コンサート」「エデュケーション・プログラム」「リージョナル・アクティビティ」）、および、現在では4本目の柱とも位置づけられる「被災地に音楽を（“東北の夢プロジェクト”）」について、それぞれの柱の有機的な結びつきと拡大を図る。

今後、社会の要請も昂ぶりを増していく中で、交響管弦楽作品を中心とする奥深い音楽と、それを楽しむ人々とのかかわりを更に広く、深くするために、積極的な演奏、音楽活動を展開していく。

IT、AIの驚異的な発展の中、人間性、人間らしさをもう一度問う時代が来ている。日本フィルはコーポレート・アイデンティティとも言える「温かさ」「人に寄り添う」に特徴を持つ集団として、新しい事業展開も視野に入れ、音楽のもと人の集う「場」を提供し、社会問題に果敢に対応していきたい。

### 1. 財政基盤の強化

正味財産が着実に増えてきた中、長年の懸案であった退職給与引当金問題を2020年度で終結させる。過去の債務の解消（163.5百万円を15年で償却）、並びに、この間新たに発生した166.7百万円（2020年度15百万円）の追加繰り入れも完了させる。

2019年度末に発生した新型コロナウイルスの感染拡大防止対応による主催・受託公演の中止・延期の影響は甚大で、財政状態は一気に不安定さを増した。

“芸術性の追求”と、社会からの要請に応える”社会性の拡充”を実施するため事業規模は年々拡大しており、財政的裏付けが必須となる。新たな資金調達の方法を探るとともに、基本財産の積み上げを検討する必要がある。必要が出て来た。

### 2. 事業の基本方針

#### (1) 芸術性の追求

2020年度「バイロイト音楽祭」への出演が決まった首席指揮者ピエタリ・インキネン筆頭に、アレクサンドル・ラザレフ、小林研一郎、山田和樹といった指揮者陣を誇る日本フィル。ここ数年はワーグナー《ラインの黄金》やマーラー・チクルス、60周年記念プロジェクトそして海外公演などを経て、より一層その芸術的成果を国内外に示している。

近年は通常のオーケストラ公演はもちろんのこと、《カルメン》《リゴレット》

といったピット内に入っただけのオペラ演奏や、最新のテクノロジーを駆使した落合陽一氏らとの取り組み等、常に現代のオーケストラとしての役割を追求してきた。本年度も演奏会形式による《アレコ》等で、積極的に役割を果たすべく邁進してゆきたい。

一方で伝統ある日本フィルに相応しい芸術的成果を常に求めてゆく。かつてよりも数段上がった演奏力をキープするのみならずより一層高みを目指す。聴衆の減少が囁かれる昨今、我々はオーケストラを楽しむ聴衆減少に対する危機感を意識して聴き手、そして音楽と対峙出来るかが大きなカギである。「古典」としての「クラシック」も大事にしつつ、音楽の沃野は実はもっと豊饒なものであることを伝えたい。特に若い世代の「未聴の作品への期待感」を刺激し、広く波及することを強く望んでいる。

毎回土曜日の定期演奏会開始前に行う恒例のプレトークの他、インキネンや山田が指揮する際には彼ら自身のプレトークやアフタートークを行い、より一層音楽深く知ってもらうための働きかけを行っている。一方的に我々が演奏を提供するだけではなく、言葉を通じてその楽曲の魅力を聴衆と深く共有することは非常に有意義である。

また最近ではホールの改修工事が相次いでおり、例えば横浜定期演奏会の会場である横浜みなとみらいホールが 2021 年 1 月から 2022 年 10 月までの長きにわたって閉館する。さいたま定期演奏会の会場である大宮ソニックシティも同様に長期のクローズを予定しており、2020 年度はその対応という日本フィルにとっての正念場が待っている。この「危機」に際し、我々は開演時間の変更やプログラムの工夫など、これまでの常識に囚われることなく柔軟に対応し「チャンス」と捉え、ひいては明るい未来につなげてゆきたい。

## (2) 社会性の拡充

日本フィルはオーケストラ音楽の演奏団体という役割に留まらず、音楽の専門集団として、社会に果たす役割をより広げていくことを目指している。「温かさ、人に寄り添う」という日本フィルの特徴を生かし、あらゆる人がオーケストラ・コンサートにアクセスしやすくなるよう努めている。エデュケーション・プログラム、リージョナル・アクティビティを一層活発に幅広く展開し発信していくことで、音楽が社会に対しできることをより強く打ち出し、「音楽を通して心の温もりを体感する」場としても機能してゆくようにしたい。2020 年度以降も、これまでの活動をいっそう積極的に行うとともに、3 回目となる「がん患者さんが歌う第九」での医療とのコラボレーションや、新たな事業として「落合陽一×日本フィルプロジェクト」による聴覚障害のある方へ向けてのコンサートの継続、「ひとり親のご家庭へ日本フィルの演奏会をプレゼント」など、社

会の多くの分野と協働して事業を行ってゆく。

### 3. 2020年度事業計画案

#### (1) オーケストラ・コンサート

##### ◆ “芸術性の追求” “社会性の拡充”

引き続き日本フィルは“芸術性の追求”“社会性の拡充”をテーマとし、両者を兼ね備える楽団としての一層の成長を目指す。今年度も、東京定期・横浜定期・さいたま定期・相模原定期・府中どりーむコンサート・名曲コンサート・サンデーコンサート・特別演奏会・第九特別演奏会等の様々の公演を通じて、芸術性と普及の両面で活動を展開してゆく。

社会性の拡充という点では、日本フィルの個性「温かさ」と充実した演奏を通して、国内外問わず、より多くの方へ音楽の持つ力を伝える。また、「オケのテイキは、面白い」と題したキャンペーンなど、音楽の力を広く伝える様々な工夫や仕掛けを通じて音楽の奥深い面白さをさらに多くの方々に広げる工夫も充実させ、質の高い演奏で我が国音楽文化の水準向上に寄与し、音楽文化を広く内外に発信する。

さらに、2018年度より開始したテクノロジーの活用や社会の新たな要請に応じる取り組みも引き続き活発に行い、音楽文化の普及と音楽を通じた社会への貢献に努め、音楽文化によって社会を豊かにすることに寄与する。また日本フィルならではの事業として挙げられる被災地支援活動「被災地に音楽を」（詳細後述）は、コミュニティの要請を受け積極的に展開しており、現在その一部は文化庁の委託事業として発展している。今後も「東北の夢プロジェクト」としてより広く展開してゆく。

##### ◆ 地域との連携

拠点である杉並公会堂では定期的に行われる「杉並公会堂シリーズ」や「夏休みコンサート」また区内小中学生を対象とした音楽鑑賞教室、杉並公会堂全施設と連携する「エデュケーション・フェスティバル」、そしてシニア層への楽器指導（「60歳からの楽器教室」）等を通じて、ホール・自治体との連携協力を図っている。また2020年には杉並区・杉並公会堂との三者連携で「東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会」の共催プログラムを実施するなど、時代に合ったコンテンツを積極的にホールとともに企画・制作してゆく。

##### ◆ 他団体との連携

他のアート分野と音楽との連携については「夏休みコンサート」においてス

ターダンサーズ・バレエ団と長年にわたって協力関係を組んでいる。このコラボレーションによって生まれるバレエ上演は、「夏休みコンサート」における毎年2万人規模の観客動員に大きく貢献している。

自治体やホール、企業、病院とのコラボレーションで行われる室内楽やワークショップなども展開。オーケストラというフォーマットにしばられることなく、一芸術団体として各地の劇場、音楽堂等との連携をより密に行ってゆく。

## (2) エデュケーション・プログラム/

### リージョナル・アクティビティ（地域活動）

オーケストラに対する社会からの要請の変化を敏感に捉えながら、日本フィルは活動の柱である「エデュケーション・プログラム」「リージョナル・アクティビティ」により一層の力を注ぐとともに、こうした活動の社会全体への周知や、様々な支援獲得についても挑戦を続けていく。

#### ◆オーケストラによるエデュケーション・プログラム

本格的なオーケストラ作品、バレエや会場全体が歌うという多彩なプログラムで構成される「夏休みコンサート」は、毎年三世代にわたり2万5千人もの家族連れを迎える国内でも例を見ないクラシックのコンサートで、45年の蓄積を基に、時代の風を敏感に読みながら今年度も首都圏、京都で実施する。また、まだまだ希少な機会である、ゼロ歳から参加可能な「春休みオーケストラ探検（共催：杉並公会堂）」では、ストーリー付きのオーケストラ・コンサートを軸に、楽器体験や美術ワークショップ、ホール探検など子供たちに芸術の幅広い魅力を味わってもらおう。

#### ◆室内楽によるエデュケーション・プログラム

様々な場面・会場に柔軟に対応し、多彩なプログラムをあらゆる世代、あらゆる地域に音楽を届けることが可能な小編成による室内楽は、日本フィルにとって極めて重要な活動の一つとなっている。九州各県や山口県ではオーケストラによるコンサートと室内楽公演を連動させることで、地域との顔の見える関係づくりに貢献。また東京都杉並区、埼玉県やさいたま市では自治体との連携により学校や各種施設を毎年多数訪問し、音楽のすそ野を広げる活動を続けている。2020年度もこれらの活動を着実に継続する。また、後述の被災地活動においても数多くの室内楽公演を行う。その他の継続事業として、中規模の編成でのエデュケーションとして、京都市内で4回目となる小学生のためのクラシック・コンサートを5月に実施。アークヒルズで毎年10月に開催されるアークミュージックウィークの音楽たんけん団にもマイケル・スペンサーと共に出演す

る。六本木ヒルズで5月に行われる六本木アートナイトでは「クラシックなラジオ体操」として斬新な室内楽の企画を届ける。

#### ◆ワークショップ

コミュニケーション・ディレクターであるマイケル・スペンサーとの20年を超える活動の継続により、音楽界における草分けとも称される日本フィルの音楽ワークショップでは、音楽の面白さを頭と体で知る機会であるとともに、音楽作品や作曲家と関連した様々な知識も提供し、参加者の向学心や好奇心を高める工夫をしている。2020年度は森美術館の現代美術展との連携ワークショップ(時期未定)や杉並区における多文化共生を目指したワークショップ(8月29日)を実施。高齢者のクラシックへの関心を高めるための「60歳からのエデュカフェ」を昨年に引き続き都内、横浜で実施する。その他海外からの修学旅行者やビジネス研修生からも依頼を受けている。楽団員のデザインによるワークショップも外部からの依頼などの機会を捉えて開催する。

#### ◆杉並区での活動の広がりや深まり

東京都杉並区とは1994年に友好提携を結び、音楽による地域文化創造を目指して取り組みを行っている。2020年度は従前同様、杉並公会堂でのオーケストラ・コンサートを核に、学校・施設への訪問、ロビーコンサート、公開リハーサルを実施する。加えて昨年度から始まった杉並区主催の多文化共生ワークショップ、75歳以上を対象とした「敬老会」、新たに「成人式」にも出演する。荻窪のNPOが主催する荻窪音楽祭では子供たちのアンサンブルを指導・共演するなど教育活動にも力を注いでいる。さらに東京都と杉並区が主催となる区内の特別支援学級へのワークショップを4月から7月にかけて開催する。

なお2018年度より開始された、杉並区のふるさと納税を通じた日本フィルの被災地での活動への支援は2020年度も継続する。

#### ◆その他の地域での取り組み

46年目を迎える九州公演では、各地の実行委員会との協働により全県10都市でオーケストラ・コンサートを開催。指揮とヴァイオリンに首席指揮者インキネン、ピアノは話題と人気の藤田真央が出演。室内楽で各地を訪問するプレコンサートなども恒例行事として継続する。

また山口県宇部市では、宇部興産主催により市・教育委員会とともにオーケストラ・コンサートを開催。事前に学校や病院も訪問し、10年以上にわたり地域の文化向上に努めている。2020年度は広上淳一指揮。

### (3) 「被災地に音楽を」(被災地におけるリージョナル・アクティビティ)

#### ◆被災地支援の継続

東日本大震災発生から9年が経過した今も、東北地方沿岸部の各地は様々な課題に直面し続けている。各地の状況を踏まえ、各自治体や地元の団体などと深く連携しながら、室内楽、楽器クリニック、ワークショップ、さらには地元の音楽団体との共演なども積極的に行っていく。2020年は岩手県の宮古市、陸前高田市、宮城県の山元町、福島県の沿岸諸地域(南相馬市、富岡町、葛尾村、三春町等)での活動を予定している。

#### ◆東北の夢プロジェクト (東北「夢」プロジェクトから改称)

沿岸各地で継続している被災地支援活動をベースに、被災地におけるコミュニティのより一層の活性化を目指し、沿岸部と内陸部が交流し新たな文化的発信の場を作る「東北の夢プロジェクト」を前年度に続き8月10日に岩手県盛岡市で、また今年度新たに福島県福島市で8月22日に実施する。沿岸部や内陸の学校吹奏楽部、合唱団、伝統芸能等の子供たちがオーケストラやバレエ団とともに舞台上がり、文化と笑顔を発信していく。実施に当たっては文化庁の主催、復興庁の後援を得るほか、県や沿岸部の各自治体、新聞テレビ等のメディア、銀行や地元企業にも様々な形での参画を呼び掛け、地域が主役の活動となることを目指し、プロジェクトを育てていく。同時に首都圏や全国企業にも協賛・協力を呼びかけ、文化芸術と社会の新たな関わりの可能性を切り拓きながら、持続可能な事業を目指していく。

### (4) 社会の変化に対する音楽団体の関わり

#### ◆テクノロジーを活用した社会的発信－「落合陽一×日本フィルプロジェクト」(オーケストラ音楽をより多くの方に伝える新たな取り組み)

落合陽一氏と共に、テクノロジーの活用によってより多くの方へオーケストラ音楽を届ける新たな事業を、2018年度に新規事業として実施した。2020年度も引き続き「耳で聴かない音楽会」(テクノロジーを活用した障害者向け社会発信)「(名称未定公演)」(テクノロジーを活用した未来創造)継続、発信していく。

#### ◆音楽を核とした社会との継続的にかかわりの発展

「がん患者さんと歌う春の第九」第3回公演を2021年度(4月)に実施予定。2020年度は、この公演に向け継続的な関係の構築と維持に努め、音楽団体としての役割を果たす。

## 【事業計画別紙】オーケストラ・コンサート 主催公演各事業の計画

### ●東京定期演奏会（サントリーホール、金曜日/土曜日 2回公演）

日本フィルの東京定期演奏会は団創立以来続く最も伝統のあるシリーズである。現代のシンフォニー・オーケストラとして、また創立指揮者渡邊暁雄以来続く日本フィルの伝統として、バロックから同時代の音楽までを網羅する幅広いプログラムを皆様にお届けする。

現在はインキネンとのドイツ音楽、ラザレフとのロシア音楽、山田和樹とのフランス及び日本人作品といったプランに基づき、内外を代表する独奏者も迎え、それぞれの個性とチャームポイントを最大限に発揮できるプログラミングを意図している。インキネンとは2020年に生誕250周年を迎えるベートーヴェンと知られざるドヴォルザークの諸作品を3年間かけて、ラザレフとは20世紀の巨人ストラヴィンスキーとショスタコーヴィチを、そして山田とは特に邦人作品の再演と発掘に注力してゆく予定である。中でもインキネンは彼自身が心酔するワーグナーの聖地「バイロイト音楽祭」で超大作楽劇《ニーベルングの指環》全曲（新演出）の指揮者に指名され大きな反響を呼んでいる。日本フィルからワールド・クラスのマエストロが誕生した喜びをお客様と共に喜びたいと思う。そのためにも是非インキネンが指揮する貴重な日本での公演に足をお運び頂く広報に努めたい。

その他にも桂冠名誉指揮者小林研一郎、広上淳一、リープライヒといった楽員からの信頼の厚いマエストロたち、そして東京定期初登場となるダレル・アンの存在も見逃せない。常に来場されるお客様の「知的好奇心」をくすぐる日本フィルならでの東京定期演奏会を、一人でも多くの皆様にお聴き頂ければ、私たちにとってこれ以上の喜びはない。

	No.	出演	プログラム
4 月	719	指揮：ピエタリ・インキネン ピアノ：アレクサンダー・メルニコフ	ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第2番 ブルックナー：交響曲第4番《ロマンティック》
5 月	720	指揮：アレクサンドル・ラザレフ ピアノ：小川典子 アレコ：ニコライ・エフレーモフ 若いジプシー：大槻孝志 セムフィーラ：安藤赴美 老人：妻屋秀和 ジプシーの老女：山下牧子 合唱：東京音楽大学	ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第1番 ラフマニノフ：歌劇《アレコ》（演奏会形式上演）
6 月	721	指揮：ピエタリ・インキネン	ドヴォルジャーク：序曲《フス教徒》 ベートーヴェン：交響曲第2番、第5番
7 月	722	指揮：広上淳一 ヴァイオリン：米元響子	バッハ：ブランデンブルク協奏曲第3番 リゲティ：ヴァイオリン協奏曲



			ブラームス：交響曲第1番 バターワース：2つの田園詩曲
9月	723	指揮：山田和樹 ピアノ：沼沢淑音 チェロ：横坂 源	ガーシュウィン：《アイ・ガット・リズム》変奏曲 ルグラン：チェロ協奏曲 水野修孝：交響曲第4番
10月	724	指揮：アレクサンドル・ラザレフ ピアノ：福岡洗太郎	R=コルサコフ：組曲《金鶏》 R=コルサコフ：ピアノ協奏曲 ショスタコーヴィチ：交響曲第10番
11月	725	指揮：ピエタリ・インキネン ヴァイオリン： ヴァディム・レーピン	グラズノフ：ヴァイオリン協奏曲 グバイドゥーリナ：ヴァイオリン協奏曲第2番 ストラヴィンスキー：バレエ音楽《春の祭典》
12月	726	指揮：ピエタリ・インキネン ピアノ：ミシェル・ダルベルト	デュティユー：メタボール モーツァルト：ピアノ協奏曲第17番 ブラームス：交響曲第2番
1月	727	指揮：小林研一郎 アルト：山下牧子	マーラー：歌曲集《さすらう若人の歌》 マーラー：交響曲第1番
3月	728	指揮：ピエタリ・インキネン オーボエ：杉原由希子	ベートーヴェン：交響曲第6番《田園》 R.シュトラウス：オーボエ協奏曲 R.シュトラウス：交響詩 《ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら》

●横浜定期演奏会（横浜みなとみらいホール、各回土曜日）

首席指揮者インキネン、桂冠指揮者ラザレフ、桂冠名誉指揮者小林らの指揮者陣と、実力・知名度に秀でた独奏者を中心に、ロケーションの良い夕方の横浜に相応しいエンターテインメント性と芸術性の双方を備えたプログラム作りに努めた。神奈川地域におけるクラシック音楽の普及に注力し、単シーズンのみならず長きにわたって聴衆に愛される「横浜定期」ならではの在り方を追究し続ける。

一方で今年度は演奏会場変更という大きな課題を背負っている。2021年1月から2022年10月まで横浜みなとみらいホールが長期の改修工事に入るため、代替地での開催を余儀なくされる。かつて定期演奏会を行っていた神奈川県民ホールを軸に、「横浜定期」として横浜での継続開催にできるだけこだわり定期会員の減少を最小限にとどめるべく、喫緊の対策が求められている。

企画面ではインキネンとのベートーヴェン・ツィクルスをベースに、彼が同じく得意とするワーグナー、ラザレフによるロシア音楽など、今の日本フィルが最も集中的に取り組んでいるレパートリーを披露し、一人でも多くの聴衆数開拓につなげてゆきたい。近年定期会員数は一定の数字を維持しているが、一回ごとのチケット券売が伸び悩んでおり、新

規聴衆拡大の新たな施策も目標である。

今回のシリーズでは、東京定期と連動しベートーヴェンを中心としたベーシックなラインナップを組むことになった。あえて「クラシック」に真正面から取り組むことで、様々の聴衆とともに時代を超えた傑作達の真価を改めて共有したいと思う。また一大観光地でもある横浜の利点を生かし、日本滞在の外国人客の来場も積極的に促し文化的交流を図ってゆくような効果を期待している。

毎回開演前に舞台上で行われるプレトーク、ならびに7月と1月にそれぞれ行われる「シーズン・ファイナル・パーティ」を通じて、オーケストラの存在をより一層近いものとして感じて頂けるよう積極的に働きかけている。近年では地元企業にもチケット販売の営業活動も熱心に行い、いわゆる「現役世代」の呼び込みにも繋がるよう努力を続けている。

	No.	出演	プログラム
4 月	356	指揮：ピエタリ・インキネン ピアノ：アレクサンダー・メルコフ	ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第5番《皇帝》 ベートーヴェン：交響曲第4番
5 月	357	指揮：アレクサンドル・ラザレフ ヴァイオリン：ボリス・ベルキン	プロコフィエフ：ヴァイオリン協奏曲第2番 ラフマニノフ：交響曲第2番
6 月	358	指揮：ポール・ダニエル ヴァイオリン： ヨゼフ・シュパチェク	ドヴォルジャーク：序曲《謝肉祭》 マルティヌー：ヴァイオリン協奏曲第2番 フランク：交響曲ニ短調
7 月	359	指揮：西本智実	ハチャトゥリアン：組曲《仮面舞踏会》 ハチャトゥリアン：バレエ音楽《ガイーンヌ》より プロコフィエフ：バレエ《シンデレラ》より
9 月	360	指揮：小林研一郎 ピアノ：實川風	チャイコフスキー：ピアノ協奏曲第1番 ベートーヴェン：交響曲第3番《英雄》
10 月	361	指揮：アレクサンドル・ラザレフ ヴァイオリン：辻彩奈	J.S.バッハ：ヴァイオリン協奏曲第1、2番 ショスタコーヴィチ：交響曲第7番《レニングラード》
11 月	362	指揮：ピエタリ・インキネン ヴァイオリン：ヒンカス・スッカマン	ベートーヴェン：ヴァイオリン協奏曲 ベートーヴェン：交響曲第8番
12 月	363	指揮：飯森範親 ソプラノ：中村恵里 アルト：富岡明子 テノール：城宏憲 バリトン：大西宇宙 合唱：東京音楽大学	ハイドン：交響曲第9番 ベートーヴェン：交響曲第9番《合唱》
1 月	364	指揮：ピエタリ・インキネン ヴァイオリン：神尾真由子	ワーグナー：楽劇《ニュルンベルクのマイスタージンガー》 より第1幕への前奏曲

			パガニーニ：ヴァイオリン協奏曲第1番 ベートーヴェン：交響曲第7番
3 月	365	指揮：ピエタリ・インキネン ピアノ： ルカシュ・ヴォンドラチェク	ドヴォルジャーク：歌劇《カーチャと悪魔》序曲 ドヴォルジャーク：ピアノ協奏曲 ドヴォルジャーク：交響曲第9番《新世界より》

#### ●夏休みコンサート

多くの子供たちが、夏休みに家族とともに身近なホールで音楽にふれ、その情操を高めていくことを願い続けてきた夏休みコンサートは、今年46年目を迎える。

料金は通常のコンサートに比べ廉価で設定し、聴衆層の拡大、特に未来のクラシック音楽ファンの育成につとめる。2020年度も一都三県で16回と京都1回、計17回の主催公演、そして依頼公演としても1回出演する。

2020年はチャイコフスキーの《白鳥の湖》をメインにすえたバレエとの共演をはじめ、例年同様開演前には「ウェルカムコンサート」、終演後は懇談会を行う予定である。

指揮／角田鋼亮、永峰大輔

司会とうた／江原陽子 他

第2部の出演／スターダンサーズ・バレエ団

#### ●ベートーヴェン・ツィクルス

首席指揮者ピエタリ・インキネンとは、2020年に生誕250周年を迎えるルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン(1770-1827)の交響曲ツィクルスを東京定期・横浜定期が連動する形でスタートしている。これまでもワーグナー、ブルックナー、ブラームスといったドイツ本流のレパートリーを共にしてきたインキネンと日本フィルによる総括ともいえるプロジェクトである。「バイロイト指揮者」となったインキネンならではの深く重厚なベートーヴェン像は、多くの日本人にとって馴染み深く待ち望まれたスタイルと言えるだろう。

#### ●その他の演奏会（首都圏）

幅広い聴衆育成とクラシック音楽の普及を目指し、多彩な公演事業を行う。

中でも、桂冠名譽指揮者小林研一郎氏との「コバケン・ワールド」「第九特別演奏会」は、たいへん人気を博すシリーズとして定着しており、日本フィルの特徴ともいえる公演として認知されている。この2シリーズを軸に、「名曲コンサート」、「サンデーコンサート」、「特別演奏会」等でさらなるクラシック音楽の普及に取り組む。また、いわゆる音楽中間層に対する様々な施策にも取り組んでいく。

#### ●九州公演

46年目を迎える九州公演は2021年2月11日より24日までの期間、九州全7県で10

公演を行う。指揮とヴァイオリンに首席指揮者のピエタリ・インキネン。ソリストにはピアノの藤田真央他といった真の実力派を迎える。

本ツアーは地元実行委員会同士の固い連携と熱い信念に基づく働きかけによって実現されている。40年を超えた今こそ、奏者・事務局は改めてその意義を見つめ直し、九州公演ならではの人と人との温かな交流を通じて感謝の意をあらわし、地域の文化振興に寄与してゆきたい。

●その他の主な共催事業

ホールとの連携による事業開催は、地元の杉並公会堂はもちろんのこと、サントリーホール、大宮ソニックシティ、府中の森芸術劇場、相模女子大学グリーンホールなどで引き続き積極的に継続していく。地域のニーズを提供しつつ文化振興を目指した新たなプログラムの提案にも努めてゆく。